朝日新聞 4/26 (夕)

人生の意味 求めずとも

渡井さゆりさん

「どの子どもも愛されて育まれますように☆」

「タイガーマスク現象に因んでご紹介頂きました」

新聞記事をはりつけた看板が、古いマンションの入り口にあった。

東京都文京区にある「日向ぼっこ」のサロンは、児童養護施設などで育った若者たちが支え合う場所だ。渡井さゆり(27)が大学3年で始めた勉強会が、NPO法人になった。

夫でミュージシャンの隆行(31)も立ち寄る。彼は会計担当。バイトに行く会員も、ここでひとくさりしゃべって「行ってきまーす」。

週2日は夕食会をする。何げない話をしながら、一緒に生きていけるように。この日は、当番が作った肉野菜炒めを9人で囲んだ。

渡井は小学生のときから児童養護施設で暮らした。親から離されて「かわいそう」といわれるけれど、施設に入ってきちんとした生活を送れるようになった。ただ、自分が大切な存在だという感覚は育まれなかった。高校を卒業し1人で施設を出た後しんどかった、という。「産みたくなかった」と母親に言われ、「義務感で生きてきた」。

最初はピースボートに乗って世界を回った。また外国に行く資金をためようとコンパニオンをしたとき、大学関係者の忘年会に出た。ふと相談すると「君みたいな人は大学で学ぶといい。夜間の福祉学科もあるから」。時間とお金を必死にやりくりして大学に通った。だが大学は、いらだつことも多かった。

弟妹のことを考えれば死ぬことはできない。死ねないならより良く生きたいけれど、生きる意味がみつからない。

諸富祥彦さん

苦しむなかで、「生きる意味を求める必要はない」と書いた本を見つけた。諸富祥彦(47)の『〈むなしさ〉の心理学』(講談社現代新書)で、ビクトール・フランクルという人の言葉だという。

渡井はその文章をシステム手帳に書き写して、つらいときに読み返した。

大学2年になって、ダウン症の男の子を毎週プールに連れて行く仕事をした。そのお母さんがある日、連絡帳に書き込んだ。フランクルの言葉を知って支えられた、と。

苦しいのは自分だけじゃない、それでも幸せになろうとしているんだ――渡井はそう思うようになった。

諸富は、カウンセラーで明治大学教授。本に書いた言葉は、日本では『死と愛』という書名で知られるフランクルの戦後最初の本『医師による魂の癒やし』を、自分で訳したものだ。

人間が人生の意味は何かと問う前に、人生のほうが人間に問いを発してきている。だから人間は、ほんとうは、生きる意味を求める必要なんかないのである。……人間は、生きる意味を求めて問いを発するのでなく、人生からの問いに答えなくてはならない。

諸富は福岡県で生まれた、自称「田舎の優等生」。いい学校に入ったら何だというのか……。受験勉強に嫌悪感を抱き、中3からは「哲学神経症」。人は何のために生きるのか、わからない。筑波大学のころ、あと3日で答えが出なかったら死のうと思い詰め、いよいよ終わりと大の字に寝転んだとき、「自分が生きているんじゃなく、いのちに生かされている」感覚に包まれた。

フランクルを読んだとき、その実感が言葉になっていて「ほっとした」という。

諸富は、宗教哲学者滝沢克己のフランクル論を読んで、理解を深めた。滝沢は神と人との結びつきを問い続けた哲学者だ。本当の生きる意味は根源的に与えられていて、その人が見つけるのを待っている、というフランクルの考えは、自分の考えと近いと著書に書いている。

滝沢は『夜と霧』でフランクルを知った。九大教授だった1965年ごろ、ウィーンにフランクルを訪ねている。

〈非常に忙しい人で、彼の書物を読んで想像していたような、じっとして物を考える宗教的・形而上学的ニュアンスの強い人とは異なった印象を受けた。……非常にエネルギッシュで、純然たる臨床医、その方の技術家という感じであった〉

(河原理子)